

問題・解答 用紙番号	54
---------------	----

の解答用紙に解答しなさい。

国 語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
看護学部、農学部【文系型】（食農ビジネス学科）

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

1～5の傍線部と同じ漢字を含むものを、ア～オのうちからそれぞれ一つ選びなさい。（1

〇点）

- 1 汚れた服をハクする。
 - ア 疑問がカイした。
 - イ あの力士はだが強い。
 - ウ 選挙でトウする。
 - エ 一時停止のシキに従う。
 - オ 漁船が離島にチャクした。

- 2 サッカーは漢字でと書く。
 - ア な文学作品に出会う。
 - イ な政権争いに巻き込まれる。
 - ウ 自分の案にチャクする。
 - エ 要求をイツする。
 - オ ガク率の推移をグラフにする。

- 3 特産品をケンジヨウする。
- ア 試合でのケントウを讃える。
 - イ ケンシンの的に介護する。
 - ウ 日本文化に関するケンシキをもつ。
 - エ 空港で感染症の予防のケンエキを行う。
 - オ ケンアンだった物価高が解消する。
- 4 太学生活に必要な総額をガイサンする。
- ア 困難を乗り越えようとするキガイを示す。
 - イ 日本海側のダンガイ絶壁にたつ。
 - ウ 選考の結果、文学賞のガイトウ作がない。
 - エ 経済発展をソガイする要因を探る。
 - オ ショウガイにわたり開発支援に取り組む。
- 5 政策協議で与党が野党にジヨウホする。
- ア 汚れた空気をシヨウカする。
 - イ 新築のブンジヨウ住宅を見学する。
 - ウ コウジヨウ的に高い生産率をあげる。
 - エ 舞台初日のコウジヨウを述べる。
 - オ オウジヨウ際が悪い。

II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

現代アメリカでは、¹ファーストフードへの批判がローカルな食文化のあり方へと波及していく中で、農産物の流通そのものを見直そうとする発想が台頭してきた。そしてそれは、地元の農業はどうあるべきかという観点へと発展してきているのだ。

ファーストフードビジネスの強大化は、食糧購入業者としてのファーストフードの地位を飛躍的に高めた。ファーストフード側は、自分たちが必要な食材を大量に発注する代わりに、低価格での納入を生産者に求めるようになる。大口の顧客を失いたくない生産者側は、コスト削減に応じざるをえない。そうした価格競争は、小規模の独立経営の農家にとっては不利だ。九〇年代末には、農場数全体のわずか三%程度にすぎない販売規模五〇万ドル以上の大規模農場が、販売額全体の半分以上を占めるに至ったのに対し、農場数で過半数を占める販売額一万ドル未満の小規模農場は、販売額全体の一%程度になってしまった。

個人経営の農場は、次第に大規模な農場やそれらを統括するアグリビジネスと呼ばれる農業企業体を買収され、統合されていった。こうしたプロセスを繰り返すことでアグリビジネスが巨大化し、その資本力にもものをいわせて農産物の生産、流通、販売、技術開発など各方面を傘下に収めるようになる。穀物や食肉の市場は、カーギル社を筆頭として、金びか時代のような寡占状態の様相を呈してくる。今や、ファーストフードがアグリビジネスに低コストを求め、それをアグリビジネスが農家に突きつけることで、ファーストフードとアグリビジネスの双方が農家を搾取して利益を上げるという構図が出来上がってしまった。このような状況は、工業における親工場と下請け工場のような関係に似ている。格差社会の二極化現象が、農業の世界にも出現したのだ。

また、アグリビジネスは、巨額の研究資金をつぎ込んで遺伝子組み換えの品種を作り出し、その種を農家に供給している。ファーストフードに納入できるような農産物の大量生産を低価格で行うためには、病虫害への耐性が強い、こうした遺伝子組み換えの品種に頼らざるをえない。しかも、この分野に君臨してきたモンサント社が開発した種の中には、一世代しか耐性が有効でない種子も少なくなく、その場合、農家は種を毎年購入し続けなければならない。農家としては、アグリビジネスに抵抗すると、種そのものの供給を断たれてしまう可能性があるため、アグリビジネスのいいなりにならざるをえないのである。

このように、現代のアメリカの農業では、ファーストフードとアグリビジネスの力が強大化し、農家は単に栽培を請け負っているような弱い立場に置かれている。しかし、農家の立場を弱くし、低価格競争や効率的生産を強いることには、X。

仮に耕地面積や家畜の数を農家は簡単には増やせないと仮定すると、大規模に効率的な生産を行うためには、単位面積当たりの収穫量を上げるか、一頭あたりの家畜の大きさを大きくするしか

い。となれば、化学肥料や除草剤を使いながら、特定の作物の単作を徹底したり、病虫害に強い遺伝子組み換え作物に切り替えたり、家畜にはホルモン剤を投与するという手法に頼ることになる。しかし、こうした手法の安全性には疑問が残る。

元来、土地には微生物を含めた様々な動植物からなる生態系があり、その中のどれか一つを突出して繁栄させること自体に無理がある。それを無理やり実現させるために殺虫剤や化学肥料や遺伝子組み換え品種に頼ることは、土地そのものが持っている養分のバランスや有害物質の除去機能を破壊し、特定の作物の生産量の増加と引き換えに土地そのものの荒廃や汚染を引き起こしかねない。化学物質が少しずつ生物に蓄積されていくことで、様々な弊害が発生することも考えられる。

また、あたかも工業製品を生産するかのようには家畜を太らせて出荷するのも、飼料の量産が大前提だ。これ自体が農業の大規模化や効率化に拍車をかける悪循環を生んでしまう。

つまり、大規模で効率的な単作による農場経営は、その作物を効率よく生産する方法であるかに見えて、将来の農業や食品の安全性そのものを犠牲にしかねない。ファーストフードの強化に伴う農業の変化は、このままこのような農業でよいのだろうかという疑問を一部の人々に巻き起こした。そして、そうした人々は、一九八〇年代後半からこうした農業の危機に対応する新たな農業のモデルを模索し始めてきている。

現在アメリカで行われている、新たな農業の代表的なモデルは、²CSA（地域支援型農業）と呼ばれている。これは、Community Supported Agricultureの頭文字をとったものだ。アグリビジネスに牛耳られた大規模農家によるファーストフードのための農業生産と一線を画し、地域社会が農業を支える取り組みで、独立経営の小規模農家を救済しながら農地を保護し、安全な食品を消費者に届けようという試みだ。CSAにはいろいろなバリエーションがあるが、典型的な仕組みは次のようになっている。

まず、ある地域の住民がお金を出し合ってグループを作り、地主と交渉して土地を提供させ、農民を雇ってそこで有機農業をしてもらい契約を結ぶ。その際、一年間の諸経費や給与を前もって支払う。農民側は、一年間の栽培計画を立て、いつでもどれだけの種類の農産物をどれだけ出資者に提供するか、計画に沿って農業を行う。もし不足が出れば出資者が負担して補い、余剰が出れば出資者に配給するか、出資者の同意の下で部外者に販売する。

こうした仕組みを支えているのは、以下のような精神である。第一に、小規模な農家を地域住民全体でサポートすることで、農民の生活を安定させ、その代わりに安全な（殺虫剤や化学肥料を用いない）農産物を住民に供給してもらおうという考えだ。第二に、土地を単作にするのではなく、多品種の作物を栽培することによって自然の生態系を守るとともに、そのような農地を増やしていくことで地域全体の環境改善をはかるという発想だ。

つまり、消費者は安さばかりを求めず、生産者は収益ばかりを求めず、むしろ、お互いが食いつ

ばくれることのないようにしながら、コストよりも食品の安全性と地域の環境の改善を優先した農業を育てていこうというアイデアなのだ。実はこうしたアイデアのルーツは、必ずしもアメリカにあるわけではなく、むしろアメリカ以外の様々な地域での実践活動をアメリカに合わせて組み合わせたものといえる。実際、C S Aのモデルの重要なヒントになっているのは、オーストリアの思想家ルトフ・シュタイナーが提唱した有機農業のモデルや、土地トラスト運動、日本の生活クラブのシステムなどであり、これらが組み合わせられてC S Aの概念が成り立っている。外部のものを組み合わせてどこにもないものを作るという点では、植民地時代のアメリカの食に似ているところがある。

典型的なC S Aでは、一〇〇家族程度が一〜二の農場と契約して進めるような小規模なものが多い。地域的には北東部やカリフォルニア、北西部や中西部の大都市近郊などで盛んになりつつある。儲かる農業というわけではないが、農民は作物の販売先が保証されているし、消費者も安全な農産物が獲得できる計算が立つ。アメリカの農場の総数約二〇〇万に対して、C S A農場はまだ一〇〇軒に満たないが、その試みは着実に広がってきている。

C S Aは、^{*}ヒッピーたちが目指した有機農業を、地域社会でよりシステムティックに実現しようとする仕組みといえる。ヒッピーたちの遺産は、より持続性のあるモデルへとここに蘇ったのだ。そして、C S Aが地道な歩みを続けている背景には、C S Aが単に食糧供給の新システムという点以上の副産物をもたらしていることも関係している。

まず、C S Aを始めた所では、住民同士の絆や連帯感、相互扶助の精神が深まる傾向にある。ともに資金を出し合い、自分たちの農場を助けているという感覚が生まれることで、農民と消費者の関係も密になっている。 Y という感覚が住民に広がり始めているのである。

こうした人間同士の関係の深まりは、地域への愛着につながり、地域を向上させようという空気を生む。時としてそれは、地域の自然を守ろうとする環境意識の高まりや、地域に生活する様々な職種の人々の生活を守っていこうとする雰囲気を作り出す。こうして、収益や効率に惑わされることなく、地域の自然や人々の生活を自分たちの手で守り育てようとする発想が強化されているのだ。

さらに、農産物を外部から供給してもらう割合が軽減されることで、いわゆるフードマイレージの問題にも効果が期待できる。輸送コストが削減されれば、二酸化炭素の排出削減にもつながるからである。自給自足的な経済圏が出来上がることで、地元でお金が回り、外部資本に富が吸い上げられていくという状況に歯止めをかける効果も表れてきている。

効率や収益よりも安全と環境を優先しようとするC S Aは、地域社会再生に貢献しつつあるだけでなく、食物の生産・流通・消費のプロセス全体を競争的市場主義経済から保護し、食糧をめぐる公的秩序を再構築しようとする考え方も浮上させた。実際、現代アメリカでは“Food Justice”

³
〔食糧正義〕という言葉が登場するようになってきた。

この言葉自体は、今世紀になってから盛んに使われるようになったものだが、その基になっているのは、「Environmental Justice」（環境正義）という概念である。これは、有害物質を出す工場や施設がマイノリティや低所得者層の居住地に集中する傾向があることを問題視する立場の人々がよく用いた言葉で、環境格差が所得格差と重なることによつてますます貧困層が搾取されていく状況に警鐘を鳴らすものだった。そうした発想が、今度は環境だけでなく、食べ物へのアクセスそのものという次元にまで拡大されているのだ。

実際、現在のフードジャスティスという概念は、環境への正義という側面と人への正義という面を併せ持つ。つまり、たとえ食べ物を得ることが目的だとしても、環境に負荷をかけたり、生態系を破壊するような農業はすべきではないという考え方や、安全な食に誰もが確実にアクセスできるようにすべきだという考え方の両方を含んでいるのである。前者がCSAと深く関係しているのは明らかだが、後者に関しては、CSAを超えた文脈にも及んでいる。典型的なのは、いわゆる「食糧砂漠」(Food Desert)をめぐるとの問題である。

CSAにおける人への正義は、皆が公平に負担して農家を支え、安全な食べ物を分かち合うという意味合いが強いのだが、この考え方がもつトラディカルになり、貧しい人でも確実に食べ物にアクセスできるようにすべきだという考え方が生まれてきた。アメリカでは、食料品店やスーパーマーケットが貧困層が多く採算が見込めないような地区から郊外の富裕層の多く住む地区へと撤退する傾向にある。それゆえ、車を持たない都市内部のスラムの貧困層の人々は、食糧の調達が難しく、結果的に健康的とは言い難いファーストフードに依存し、肥満が増えるという悪循環が生まれている。現在アメリカでは、こうした「食糧砂漠」を解消するためのNPOが各地で活動しており、小売業に協力を要請しながら食糧へのアクセスを改善しようとしている。

こうしたフードジャスティスの考え方に基ついて現実の社会を変えようとする実践的な取り組みは、昨今では「⁴フードアクティヴィズム」と呼ばれている。その種の動きの中には、食糧砂漠を解消するために小売業に働きかけるといった、消費者運動的な要素を含むものだけでなく、自分たちの手で安全な食糧を生産しようとする試みへと発展している例もある。CSAでは農家を雇うのが基本だが、自らが農民の役割を果たすことで食糧を確保しようというのだ。そして、地域住民が共働して食糧生産に従事することで、自分たちの住む場所の自然環境を再生し、共同体の基盤を強化しようとする動きも出てきている。そのユニークな実践例として、シカゴのスウィート・ウォーター協会がある。

この団体が主に活動しているのは、シカゴの代表的黒人居住区、サウスサイド地区だ。都心からはバスや地下鉄で三〇分程度の距離にあり、いわゆる都市中心部のスラムとはやや違った雰囲気のところだが、貧困や犯罪など数々の問題を抱え、失業率も高く、食料品店も少ない。この団体は、廢

校となった学校の敷地を農地に転用し、周辺住民に農業の技術指導を行っている。住民たちは、この団体からの支援の下、必要な設備を自分たちで作し、定期市を開催している。加えて、この団体が重視しているのは、住民自身が意識改革の輪を広げていくことだ。住民同士の啓発活動やアートの要素を加味したD I Y活動などが盛んに取り入れられている。農地とともに耕す経験を核に、食糧供給と生活の安定化を図り、住民が地域の問題を自力で解決していけるような地域創生のあり方が模索されている。農地を再生させ、人々が農民の役割を共有することによって、人々を、ひいては地域社会を再生させるというシナリオは、フードアクティヴィズムの中でも注目すべき試みといえよう。

(鈴木透『食の実験場アメリカ——ファーストフード帝国のゆくえ』)

- * 金びか時代……一九世紀後半、南北戦争終了後のアメリカにおいて資本主義が急速に発展し拜金主義的な様相を示した三〇年弱の期間を指す。
- * ヒップビー……一九六〇年代後半のアメリカに登場した、既成の価値観にしばられない社会生活を送ることを選んだ若者のこと。
- * D I Y……Do It Yourselfの略。既製品を購入するのではなく、必要なものを自ら作ること。

問一 傍線部「ファーストフードへの批判」とあるが、ファーストフードと農業について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 農場数で過半数を占める販売額一千万ドル未満の小規模農場は、今も販売額全体の半分以上を占める。これらの生産者は、必要な食材を大量に発注するファーストフード側の要求により、コスト削減に応じざるをえない。

イ 農産物の生産、流通、販売、技術開発など各方面を傘下に収めるようになった農業企業体がファーストフードに低コストを求めるようになった。このため、ファーストフードよりも農業企業体の方が利益を上げるという構図が出来上がった。

ウ 農場数全体のわずか三％程度にすぎない販売規模五千万ドル以上の大規模農場が、九〇年代末には、販売額全体の半分以上を占めるに至った。これは、ファーストフード側に、みずからの農作物を優先的に納入することを認めさせたためである。

エ 農家が栽培する種の中には一世代しか耐性が有効でない種子も少なくないので、農業企業体は農家から種を毎年購入しなければならない。その資金確保のために、農業企業体はファーストフード側のいいなりにならざるをえない。

オ 大量発注するファーストフード側は低価格での納入を生産者に求め、生産者は応じざるをえないが、これは小規模の独立経営の農家には不利な競争である。この不利な競争の結果、小規模農場は大規模な農場や農業企業体を買収され、統合されていった。

問二 空欄 に入る最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 関心を示す企業は皆無である

イ アグリビジネスも抗えない

ウ 効率化のメリットがある

エ 多くの代償も伴う

オ 誰もが無関心である

問三 傍線部2「C S A (地域支援型農業)」について説明した次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア C S Aは、小規模であっても作物の販売先が保証されている農業であるが、北東部やカリフォルニア、北西部や中西部の大都市近郊ではすたれつつある取り組みである。

イ C S Aは、独立経営の小規模農家を救済しながら農地を保護し、安全な食品を消費者に届けようという、地域社会が農業を支える取り組みである。

ウ C S Aは、小規模な農家を地域住民全体でサポートすることで、農民の生活を安定させ、その代わりに安価な農産物を住民に供給してもらう取り組みである。

エ C S Aは、一品種の作物を効率的に栽培することによって自然の生態系を守り、そのような農地を増やしていくことで、地域全体の環境の改善をはかる取り組みである。

オ C S Aは、世界各地における実践活動をモデルとして組みあわせ、生産者と消費者の双方が、地域の環境の改善よりも食品の安全性を優先した農業を育てる取り組みである。

問四 空欄 に入る最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 生産者と消費者が、一緒に伝統農法を守っている

イ ヒッピーの理想をともに伝えることが重要だ

ウ われわれ消費者こそが生産者である

エ 安定した収益を得るための経営パートナーだ

オ 単なる消費者ではなく、農産物の共同生産者だ

問五 傍線部3「食糧正義」について説明した次のア～カのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

- ア 食糧正義は、安全や環境よりもアメリカの消費者の平等を最優先する考え方であり、マイノリティや低所得者の居住地における食糧供給が優遇される傾向を問題視している。
- イ 食糧正義は、環境正義という、環境格差が所得格差と重なることによつてますます貧困層が搾取されていく状況に警鐘を鳴らすために用いられた概念が基になっている。
- ウ 食糧正義は、食糧をめぐる現状の公的秩序を維持するためには、食物の生産・流通・消費のプロセス全体を競争的市場主義経済から保護しなければならないとする。
- エ 食糧正義は、たとえ食糧を得るためでも生態系を破壊する農業はすべきではないという環境への正義と、誰もが安全な食を得られるべきだという人への正義の両方をもつ。
- オ 食糧正義は、富裕層に負担を要求しながら貧困地域の人々の食糧へのアクセスを改善して「食糧砂漠」問題に対処するような、人への正義をもつとも重要視している。
- カ 食糧正義は、誰もが安価な食に確実にアクセスできることを優先するためには、環境への負担が高まることを容認すべきであるという立場から生み出された。

問六 傍線部4「フードアクティビズム」に含まれる取り組みとして適切でないものを、次のア～オのうちから一つ選びなさい。

- ア 食糧へのアクセスが悪化した都市中心部のスラムの貧困層を、食料品店やスーパーマーケットが多い郊外へと移住させる取り組み。
- イ 食糧へのアクセスが困難な貧困地域における「食糧砂漠」の解決のために、NPOが活動して、小売業に協力を要請しながら食糧へのアクセスの改善を目指す取り組み。
- ウ 地域住民が共働して食糧生産に従事することで、自分たちの住む場所の自然環境を再生し、共同体の基盤を強化する地域創生の取り組み。
- エ 廃校となった学校の敷地を農地に転用し、周辺住民に農業の技術指導を行つているシカゴのスウィート・ウォーター協会の取り組み。
- オ 農地を再生させ、農民の役割を人々が共有することで地域社会を再生するというシナリオに基づく取り組み。

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致するものには a、合致しないものには b を、それぞれマークしなさい。

ア 現代アメリカの穀物や食肉の市場は、カーギル社を筆頭とする少数の大企業が市場を支配する様相を呈している。

イ ファーストフードの強大化に伴う農業の危機に対応する新たな農業のモデルが、一九八〇年代後半から模索し始められた。

ウ 大規模で効率的な単作は作物を効率よく生産する経営方法に見えるが、生態系への影響など様々な弊害によつて、将来の農業や食品の安全性そのものを犠牲にしかねない。

エ C S A のモデルの重要なヒントになっているのは、モンサント社がアメリカで推進した土地トラスト運動である。

オ C S A は食糧供給の新システムとして、C S A に関わる農民、消費者、N P O だけでなく、アグリビジネスやファーストフードからも支持を受けている。

III

次の文を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

ポスト・スポーツは、現代のさまざまなスポーツのなかに具現化される諸実践を指し示している。例えば、近年のランニング界を i する厚底形状のマラソンシューズは、優れたアフリカ人ランナーたちの高速ランニングを実現させているとされる身体の運動を高精度に解析・分析して開発されたものだ。短距離走のように速いピッチで走るためには爪先^{ツメノサキ}だけを接地させる必要がある。そのため^{かかと}に踵部分を底上げして、まるで下り坂を駆け降りるような走り方を実現させるのが近年の厚底シューズの特徴となっている。さらに地面からの反発を推進力に変換するために、ソールにはカーボンプレートが埋め込まれている。^①近年のマラソンの高速化は、先端テクノロジーによって開発されたシューズ＝機械とランナーの足という部位が接続されてはじめて実現されているのだ。

このような身体拡張や補綴^{ほてつ}の技術は、ランナーの走り方それ自体を変えていく。多くのマラソンに関する専門家たちが指摘しているように、このシューズの特徴はランナーのランニング能力を補強・増幅するというよりも、シューズの能力を最大限に引き出すための特有の走り方が要求されるという点にある。新しく創案された身体技法——シューズを操縦するスキル——に応じて、脚の形状や筋肉の付き方といった人体の部位をも物質的な次元において変化させていくことになる。操縦を間違えれば怪我のリスクが高まるということでもある。これは単純な技術決定論とは言い切れない。この場合、機械(道具)やそれを扱う人間主体が、予めそれぞれ別物としてあるのではない。また、機械が主体であるか、人間が主体であるかといった主従関係も明確ではない。そこにあるのは、足や爪先といった個々の部位と開発されたシューズとの接続が、機械と部位それぞれのはたらしきを引き出しているという関係である。

人工物と足の接続によって引き出されるスピードは、記録の向上を目指すという意味においては近代の典型的なイデオロギ―をより一層具現化するものである。だが、その過程では「アフリカ人」のナチュラルな身体能力と「天然化」された文化(走り方)が想定されていることを見逃してはならない。見方によってはまるで天然資源の搾取や略奪とも受け取れるが、むしろここで指摘しておかなければならないことは、先進国のスポーツ界におけるポスト・スポーツ化が、ここでは同時に「アフリカ人は生まれながらにマラソンに向いている」「身体能力が高い」という人種化された神話を補強しているという点である。先進諸国の身体が機械とのハイブリッド化を実現するその下地には、近代の「文明」と「自然」の二元論が、西洋とアフリカの境界線に重ねられて温存されているのだ。

このポスト・スポーツの文脈においても、文明／自然の二元論をめぐる植民地主義的な想像力の粘り強さは温存されているものの、そこに置かれているのは従来のように文明化・馴致^{じゆんせ}の対象としてのアフリカ人身体ではないだろう。アフリカ人ランナーが持つとされる特有の身体技法は——そ

れがスポーツブランド企業によって捏造されるフェティッシュ化された幻想であるとしても——、先進国のランナーたちがアフリカ人の走り方を模倣するという意味で、限定されてはいるものの、そこに②対称性を生み出す糸口があることもまた事実なのである。

スポーツは模倣によって獲得された技術が競い合う場でもある。このような事例は、文化人類学者のマイケル・タウシグが、ベンヤミンの「ミメーシス能力」に関する論考を手がかりにしながら「第二の自然」と呼んだものを想起させる。それは「文化が第二の自然を作るために使う性質であり、コピーし、真似をし、模型を作り、違いを探索し、他者へと変容し、他者になる能力」のことである。自己と他者、主体と客体といった確固たる境界線によって区切られた縁取りのあり方に揺らぎを与える力を再び手に入れることができるのかという問いのもと、タウシグは模倣を介した「異質な他者」との出会いを丹念に描き、近代社会を駆動してきた「文明」／「自然」の二項対立の構造に割って入っていく。

タウシグは「第二の自然」たる「模倣の能力」として、しばしば機械やモノや道具を介在させた模倣の実践事例を紹介している。ここにはテクノロジーの発展が、近代のなかで抑圧されてきた模倣能力を復活させると考えているふしが散見される。厚底シューズというテクノロジーが模倣を誘発して他者にはたらしかけるための技法になる、あるいは意思や意図とは別に他者のようになりたしとする欲望や営為は、人工物の力で走力を増幅させているに過ぎないという素朴な近代スポーツ批判の否定的見解とは違つところに、スポーツを運ぶことになるだろう。

よく知られるように、二〇二二年に開催されたロンドン・オリンピックでは、南アフリカ共和国のオスカー・ピストリウスがカーボン繊維製の義足を装着してトラックを疾走し、「ブレードランナー」と称された。また、ドイツのマルクス・レームは、義足のジャンパーとしてロンドン、リオデジャネイロ、東京で開催されたパラリンピックの走り幅跳びで三連覇の偉業を成し遂げた。オリンピックの優勝記録を超える成績をたたき出しているレームは、オリンピックへの出場を強く望んでいるものの、生身と機械が融合した身体は、競技の「公平性」に抵触するという理由で却下されたままだ。このようななかで私たちが目撃してきたのは、物体的・物質的な現実におけるアスリートのサイボーグ化である。生身と機械とが融合したアスリートたちは、近代スポーツが躍起になって守り続けてきた「自然の身体」という理想を激しく揺さぶり続けている。そして、③この激震の中心にあるのがドーピングだろう。

ドーピングは、競技の「公平性」とアスリートの「健全性」を条件付ける「自然の身体」によるパフォーマンスを裏切るものとして論争を巻き起こしてきた。ドーピングの技術開発とそれを見抜こうとするアンチドーピングの不毛な努力が絶えざる競争を繰り返していることは誰もが知るところである。薬物の摂取とマスクング・エイジェント（隠蔽剤）とが一体となった「薬理的現実」は競技スポーツのなかに普遍的に埋め込まれている。また、ドーピングがホルモン数値に影響を及

ばすことが批判の対象になってきた一方で、先天的に体内のホルモン数値が定められた基準から逸脱している選手が競技から排除されるという事例も多く報告されている。南アフリカ共和国の女性スプリンターであるキャスター・セメンヤのように「性分化疾患」と診断された選手が他の「自然」な身体を持つ女性選手たちから厳しく区別／差別され、医学的・薬学的な処置を通じてホルモン数値を人工的に「改良」することによってのみ、競技の「公平性」という舞台に立つことが許されるという事態が生じている。

近年のドーピング問題に関する研究のなかで共通して論じられる事柄は、「ドーピングが、諸々のスポーツ実践や競技スポーツの全般的な発展のなかに、構造的かつ論理的に組み込まれている」という点である。科学史家のクロード＝オリヴィエ・ドロンが指摘するように、ドーピングは「スポーツに内在的にして正常な部分」なのである。「有史以来」そうだったと文化人類学者の今福龍太が強調するように、近代社会のはるか以前から、人間は継続的に人工的なテクノロジーや方法によって身体の機能や作用を増強・拡張させてきた。今福は、むしろ手つかずの「自然」状態である身体を「健全」なものとして崇めることは、歴史上とても特別な出来事であり、近代の発明品であるとすら述べている。ここで今福は次のような問いを立てる。不自然なものだとみなされるような身体加工や身体拡張が、どうしてスポーツの身体をめぐってのみ処罰や排除の対象となっているのか。「公平性」や「健全性」の神話が、アスリートの身体に過剰に仮託されているのはどうしてなのか。これらの問いに対して今福は、西洋の理想的自我を体現するスペクタクルとして発明された近代オリンピックが、絶えずアスリートの身体を通じて西洋近代の「人間性」の正しさを確認し続けてきたと答えている。

今福によって焦点化されたような近代の身体イデオロギーを、文芸評論家の三浦雅士や批評家の多木浩二は「身体の零度」と呼んだ。世界各地にあつたヴァナキユラーな身体が、近代の科学、医学、数学、さらには機械や人工的なテクノロジーによって精密に測定され、数値化・記録化される対象となり、画一化された抽象的座標面上において比較可能な表象へと置き直されていくプロセスを、三浦は近代社会の成立基盤に重ね合わせている。そこに立ち現れたのが「④ 身体の零度」という理想的身体である。しかしながら、この身体は「レオタード」というコスチュームの開発に象徴されるように「裸で何も塗らず、形を変えず、飾らない人間の身体」でもある。「自然な身体とは、もつとも望ましい状態で生育した身体ということであり、つまりそれは、もつとも人工的な、もつとも不自然な身体」という逆説と矛盾を含んだ理念であり、それこそがオリンピックを成立させるもつとも重要な土壌たる「④ 身体の零度」だったのである。

未開への蔑みと憧れを同時に内包する近代の理想的な「人間」像は、文明／自然の二元論を基軸にしなが、男性／女性、西洋／アフリカ、白人／黒人といった確固たる境界線による分割の紛れもない証拠として身体を必要としてきた。こうしてスポーツは近代の「人間」——男性が優位で、

白人が中心で、西洋社会が進んでいて、五体満足な健常者を正常だとする考え方を確認し維持する強力なイデオロギ―装置として君臨してきたのである。したがってここでの身体をめぐって打ち立てられる文明／自然、心／身体といったデカルト的二元論は、一見すると対立するふたつのもののように思えるが、じつは互いが互いを参照し、互いを欲望しあつてはじめて成立するひとつの統一体なのだ。この二元論は、矛盾や逆説をデフォルト設定したものであり、それこそが「身体の零度」なのである。絶えず「不自然」なものを構成しなければ、理想とされる「自然」は保たれない。三浦や今福のスポーツ身体論は、「公平性」や「健全性」の神話がアスリートの身体に過剰に仮託されている要因をここに発見していくのである。

ポスト・スポーツは、「身体の零度」の限界面に立ち現れている出来事である。足は最新鋭のテクノロジーが ii されたランニングシューズと接続する。皮膚はハイテク素材のウェアと接続する。障がいを持つ部位にはカーボン繊維製の器具が接続する。もはや人工的な機械と生身の部位が接続しなければ、スポーツそのものが成立しない。そこには「身体の零度」という逆説を抱えたデフォルト設定の前で躊躇する態度を、補綴や補助によつて運動の能力を高める器具開発のグローバル市場が悠々と飛び越えていく現実がある。資本主義の市場にとつて「身体の零度」は古く使えないものになっているのではないだろうか。

これまで数多くの身体論やスポーツ論が、デカルトの心身二元論を批判し、精神に従属した身体に息吹を与えようとしてきた。しかし事態は思わぬ方向に動き出している。^⑤例えば、GPSを内蔵した時計型ウェアラブル端末に常時接続された身体がジョギングする。その端末に同期されたスマホには、衛星測位システム機器を主力とする巨大企業の開発した専用アプリを介して走行距離、速度、ペース、ラップタイム、歩数、歩幅、移動経路、心拍変動、さらには推測された最大酸素摂取量や消費カロリーなど、ジョギングする身体から出力されるものが数値データとなつて可視化されていく。「私」の身体運動は、生理データやエネルギー変動に関するデータとなつて絶えずリアルタイムで数値化され、それが紛れもない事実や証拠となつて「私」を再構成する。心に宿っていたはずの主体は、一見すると身体に宿るかのように振舞いはじめるわけだが、身体から産出されたデータが「私」の意思や思考とは無関係に「私」であることを証明する証拠＝データとなつて、今度は身体から「私」を陳外する。ここでは、心に宿る主体が「私」なのか、それとも身体化された主体こそが「私」を構成するのかといった二元化された問いが成立しないのだ。心と身体との間で主体の居場所を奪い合う抗争状態を不毛にする状況が生まれているのである。

スポーツをめぐって生じるこのような新しい状況は、身体がひとまとまりの総体として、また普遍的なものとして十全なかたちでいつもそこにあるという考え方を根本から失効させる。心と身体が対立しながらもユニットとしてそこに「ある」という前提に立つた心身二元論自体が揺らいでいるのだ。ポスト・スポーツは、テクノロジーの進展に伴つて、私たちがこれまで「身体」と呼んで

きたものが指し示す対象それ自体が変わっていることを予告している。言い換えれば、これまで見えなかったものが、テクノロジーやデータといった新たな文法によって見えるようになったと言ってもいいだろう。

(山本敦久「ポスト・スポーツ論の射程」)

* ポスト・スポーツ……機械や薬品や素材といった人工的なものなしでは成立しない、現代スポーツの状況を指す。

* ヴァナキエラー……「それぞれの土地における固有の」の意。

問一 空欄 ・ に入る語として最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | |
|---|-----------------------|----|------|
| i | ア 淘汰 ^{たうた} | ii | ア 凝縮 |
| | イ 圧倒 | | イ 乱用 |
| | ウ 標榜 ^{ひょうぼう} | | ウ 密集 |
| | エ 席卷 | | エ 忘却 |
| | オ 凌駕 ^{りょうが} | | オ 併合 |

問二 波線部 X・Y の語の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | X 散見される | Y 抵触する |
|-------------|---------|
| ア あちこちに見られる | ア あらがう |
| イ 間違いと見なされる | イ 食い違う |
| ウ 注目を集める | ウ さしざわる |
| エ 同一視される | エ 反発する |

問三 傍線部①「近年のマラソンの高速化」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 厚底シューズのソールに埋め込まれたカーボンプレートによって、爪先だけを接地させる走法が可能になっている。

イ 身体運動を解析・分析して開発された厚底シューズではなく、ランナー自身によるランニング能力の補強・増幅によって、好記録が生まれている。

ウ 先端テクノロジーによって開発された厚底シューズをランナーが着用することで、ランナーの身体の形状や動き方が変わってきている。

エ 厚底シューズの登場によって、人間はその身体技法を変えることなく高速でのランニングを行えるようになってきている。

オ 厚底シューズは、アフリカ人ランナーたちが下り坂を駆け降りる際の走り方を実現するようにデザインされており、広く支持されている。

問四 傍線部②「対称性を生み出す糸口がある」とはどのようなことか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 抑圧されてきた模倣能力が復活して「異質な他者」と出会うことで、近代社会の「文明」と「自然」の二項対立を駆動させるようになったこと。

イ 近代の「文明」と「自然」の二項対立が、確固たる境界線によって区切られた縁取りのあり方を再び手に入れるようになったこと。

ウ アフリカ人に固有の「自然」な身体能力に対して、科学技術が生み出した厚底シューズが可能にする「文明」の走り方が対置されるようになったこと。

エ 文明化や馴致の対象ではなく、なりたい他者としてアフリカ人が模倣されることで「文明」と「自然」の二項対立が再考されるようになったこと。

オ ポスト・スポーツの状況において、文明／自然の二元論をめぐる植民地主義的な想像力の粘り強さが温存されるようになったこと。

問五 傍線部③「この激震の中心にあるのがドーピングだろう」とあるが、ドーピングについて述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア ドーピングは近代社会において問題視されているが、身体の機能や作用を増強・拡張させることは、近代以前から社会に内在していた。

イ 「性分化疾患」の患者であるアスリートに対して、ホルモン数値を人工的に「改良」することが、ドーピングと見なされて批判されている。

ウ ドーピングを見抜こうとするアンチドーピングの努力によって、ドーピングの技術開発の競争は不毛なものに終わっている。

エ 有史以来続いてきた、手つかずの状態である身体を健全なものとして崇める考え方が、ドーピングをめぐる議論において疑問視されている。

オ 現代のオリンピックにおいて、義足のジャンパーのように生身と機械が融合したアスリートたちの活躍がドーピング問題の根幹をなしている。

問六 傍線部④「身体の零度」という理想的身体」について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア 身体能力を補綴・補助する器具開発のグローバル市場が発展してきたのと時期を同じくして、「身体の零度」も現在まで発展してきた。

イ 「身体の零度」は心／身体の二元論が、じつはひとつの統一体として成立しているとする概念である。

ウ 人工的な機械と生身の身体の部位が接続しなければスポーツが成立しないという逆説を、「身体の零度」は内包している。

エ 「身体の零度」は、人工的な身体と自然な身体が近代オリンピックに並存するという逆説と矛盾を含む理念である。

オ ヴァナキュラーな身体が数値化・記録化を通じて比較可能な表象へと置き直された近代社会において、「身体の零度」という概念が立ち現れた。

問七 傍線部⑤「事態は思わぬ方向に動き出している」とあるが、どのような事態が生じているか。

次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア これまで二元論を構成してきた心と身体のうちどちらも、主体を構成するようになっていること。

イ 身体から出力された数値データが「私」を再構成するため、主体が身体に宿ると見なされるようになったこと。

ウ 普遍性を有するひとまとまりの総体として身体を見なすことが、そもそもできなくなっていること。

エ 身体運動を可視化する機械の出現によって、デカルトの心身二元論を批判できるようになったこと。

オ 数値化された身体運動のデータとは無関係に、心に宿る主体が「私」を構成するようになっていること。